

移植胚選択において胚盤胞直径は重要視すべきか

柴田美智子¹、佐藤学¹、中岡義晴¹、森本義晴²

¹IVF なんばクリニック ²HORAC グランフロント大阪クリニック

【目的】

胚盤胞の選択的単一胚移植が一般的となった今日では、どの胚盤胞を優先し移植するのかという判断が重要である。胚盤胞直径と妊娠結果の関連について報告がされてきているが当院では実測の結果を評価基準として取り入れていなかった。そこで胚盤胞直径を含めた形態的評価のいずれが妊娠、流産及び出産と強く関連しているのか検討しそれらの順位付けを試みた。

【方法】

2014年1月～2017年12月までに単一胚盤胞の凍結融解胚移植を施行した357周期の5日目胚のみを対象とし、透明体を除く胚盤胞直径(123.245 μm)とGardner分類に基づいた発育段階(BL3.5)、内細胞塊(ICM:A or B)、栄養外胚葉(TE:AC)それぞれの因子が妊娠、流産及び生産に及ぼす影響についてロジスティック回帰分析を用いて検討した。

【結果】

妊娠に影響を及ぼす上位3因子はTE(OR; 1.782 95% CI; 1.211 2.622 p<0.01)、ICM(OR 1.752 95% CI; 1.022 3.006 p<0.05)、発育段階(OR 1.353 95% CI; 0.957 1.911 p 0.0866)であった。流産及び出産に影響を及ぼす上位3因子はともにTE、ICM、発育段階であったが有意な差はみられなかった。

【考察】

今回の検討では胚盤胞直径は胚選択の際に優先すべき因子とはいえなかった。成長段階においても最重要因子ではないことから妊娠成立には細胞数を要素にした形態学的評価が重要であると考えられる。特にTEの影響が最も強く、着床過程における胎盤形成は重要な役割を担っている事が再確認できた。